文法指導と内容理解を両立させる古文授業法
ー 『枕草子』を用い敬語に着目して ー

教科教育高度化分野（17220909）松　本　綾　佳

本研究は，国語科古典分野の長年の課題である文法指導と内容理解の両立を目指し，古文教材の『枕草子』を用いて授業実践を行った。生徒に敬語の性質を教授し，その知識を用いて教材で使われる敬語を読解させることは,人物像や話の内容に生徒の目を向けさせ,より充実した内容理解につなげることができることがあきらかになった。

［キーワード］　古典教育，文法指導，敬語，枕草子

１　はじめに

(1)問題の所在と研究の目的

プレゼンテーションⅠでは,『伊勢物語』を用い,和歌から物語を創作する「リライト」や発問を工夫して指導を行うことで,「言葉によって感じたり想像したりする力，感情や想像を言葉にする」資質・能力の育成と，古典に親しむ態度を養えることをあきらかにした。一方で,実践の反省として,文法指導が不十分であったことが挙げられた。また昨年度，第１学年普通科の生徒 154 名にアンケート調査を行ったところ，古文作品の話の内容については,「おもしろい」「興味がある」という好意的な意見を選んだ生徒が約 50%いたのに対し,文法の学習については,「難しい」等否定的な意見が約 80%を占めていたことから，古典作品の内容に興味はあっても，文法の学習については苦痛に感じている生徒が多いことがわかった。新学習指導要領においても，文法事項の指導に偏った授業の改善が挙げられており，それについて田中(2018)は,「古典嫌いの生徒が多くなっていることの原因に，文語文法，漢文句法，古文単語の意味用法を取り立てた指導が行われがちな現状があるという問題意識」があると述べている。この問題意識は，今に始まったことではなく，従来の学習指導要領でも指摘されてきたことであるが，改善が見られないのが現状である。森野(1981)は,「古典学習のねらいは，古典文法をマスターすることじたいにあるのではなく，それを有力な武器として，文学作品としての古典を解釈し，鑑賞するというところにある」と述べている。また久保田(2006)は,「その言葉の持つ拡がり，微妙な響きや味わい，色合い」を知るためには,「それが使われている文章，文脈の中で理解し，味わうべき」であるとしている。古典を読み味わうためには，単語や文法は必要不可欠なのである。

以上のことから，本研究では，文法指導と内容理解双方の充実を図る授業法の提案を目指す。本研究では，古典文法の中でも，敬語に着目した。

(2)敬語を対象とした理由

１つ目は，敬語は内容理解と密接に関わる文法であるという点である。高校生に向けた参考書の中で，富井(2004)は「地の文の敬語は主語を判別する魔法の杖」と表現して解説を行っている。また，森野(1976)は，敬語を学習するということは「敬語という表現面を通じて,その作品の世界を,味到というには距離があるにしても，できるだけ生き生きととらえることができるよう知識をたくわえ，かつ精練することを目指すということになる」と述べていることからも，敬語の学習は古典の内容理解へとつながるものであることがわかる。

２つ目は，敬語の指導は多くの教材に対応可能であるという点である。敬語は,『枕草子』や『源氏物語』,『平家物語』,『大鏡』など，古典教材の中で敬語が使われていない作品を探す方が困難なほど使用頻度が高い。よって，敬語の指導法を確立すれば，本研究で取り扱う教材以外での適応も可能になると考えた。

このような敬語の性質から，生徒が敬語に着目して自ら文章を読解することは，自然と，話の内容や人物像を読み取ったり想像しようとしたりすることにつながり，内容理解の足掛かりとなるのではないかと考えた。

(3)研究の方法

古文教育における文法指導についての論文や,

敬語の指導に関する論文に当たり，指導法を検討する。『枕草子』の文学研究に当たり，『枕草子』を用いて指導できる事柄を調べる。これらを踏まえて実践案を作成し，教職実践演習Ⅲで実践を行った。結果の分析と考察を本稿でまとめる。

２　先行研究

(1)文法偏重を改善する古文の授業法

文法に偏った古文の授業を打破しようという授業実践の中には，生徒に古典の魅力に気づかせ，親しみを持たせるために，内容理解を重視した指導法を提唱するものが多く見られた。しかしこのような，興味関心・内容重視の実践は，文法指導そのものの改善とはなっていない。仲尾(2014)は，そのような実践を行った反省として,「文法事項にかける時間が少なくなってしまったため，細かい解釈や文法問題には手が回らないジレンマ」が生じたとしている。

一方，文法指導そのものを改善しようという試みもある。前田(1998)は，文法指導の理想的な指導について,「文法を要素主義で考えるのではなく，文脈で支えられた表現の背後にあるものとしてさりげなく身に付けてもらう」ことを述べている。続けて,「文法がきちっと分析出来てはじめて文の意味が理解出来るという考え方だけではなく，おおよその文意が雰囲気として分かることによって，逆に文法的な表現の本質が分かるという考え方もあろう。」と述べている。前田の提案のように，内容を把握したのちに文法に着目するという指導法を実際に行っているのが川本(1989)である。川本は，古文入門期の高校生に対して，助動詞「けり」を中心に，３つの教材を用いて授業を行っている。実践の工夫として，現代語訳を積極的に用いること，文法の用語を用いずに教材を鑑賞すること，助動詞に関しては鑑賞が終わってから触れることを挙げている。

川本の実践や前田の見解から，まず内容を大まかに把握させ，鑑賞した後に文法を詳しく見ていくという流れが，文法指導の改善と内容理解を結び付けるひとつの手立てとして有効であることがわかる。

(2)敬語の指導

仲村(1989)は，(1)で取り上げたような，鑑賞の後に文法に焦点を当てていく実践を，敬語指導にて行っている。仲村の実践も，内容理解と文法指導が結びついた指導法であると思われるが，仲村が指導上の要点として挙げている「作中人物の心理に関係する敬語のみを学習の場にのせ」,「単に身分的な関係で用いられている程度の敬語」は学習の対象から外しているため，教材を選ぶ実践であると言える。

仲村ほどの偏りのない敬語指導の可能性，そして，鑑賞から文法へという流れとは逆の指導法を示唆しているのは，土屋(1994)である。土屋は，敬語の指導法として,「敬語であることを先に判断し，文脈を考える，という，敬語から読解へという流れ」によって「暗記を実例で理解へと結びつける」方法が「活きた敬語の教え方である」と述べている。更に土屋は，このような指導の流れにより，実際の文章での敬語の使われ方や，敬語によって主語や目的語がわかるという面白さを生徒に教えることで，生徒の古典そのものへの興味も増すことになるであろうと述べている。

一見，土屋の主張は，生徒に文法知識を暗記させ現代語訳を作らせるという従来の古文の授業と変わらないように思える。そうではなく，敬語を，例えば，これは尊敬語だから書き手から動作主への敬意である，ということは,「この動作をした人は身分の高い人物である。この本文だと誰に当たるであろうか。」というような流れで古文を読むことにより，ただ敬語を判別するだけの授業よりも内容理解が深まるということであろう。土屋の提唱する敬語指導は，文法から内容理解へという，前田とは逆のアプローチである。しかし土屋は「暗記」を提唱しているが，生徒に「暗記」を強要するのは，冒頭でも触れたような古典嫌いを生む可能性が高いと考える。よって，本実践では，生徒に知識の「暗記」をさせるのではなく，文法書等を用いて分析させる実践を行う。それによって敬語の読解を実践していく中で敬語の性質を感じることを主眼においた指導法を提案したい。

以上(1)(2)の検討から，本研究では，内容理解から文法へという流れではなく，文法から内容理解へつなげる実践を，敬語の指導で目指すこととする。

(3)敬語の指導法の案

敬語を指導する際の観点を以下のように考えた。

①事前に敬語にはどのようなものがあるのか指導する。(知識の習得)

ここでいう敬語の知識とは,以下のものを示す。

・誰への敬意か
尊敬語：動作主への敬意
謙譲語：動作の受け手への敬意
丁寧語：聞き手への敬意
・誰からの敬意か
地の文：書き手からの敬意
会話文：話し手からの敬意

つまり，３種類の敬語が，誰への敬意を表すのか，地の文か会話文かによって，誰からの敬意を表すのか，ということのみ指導することとし，例えば「参る」が謙譲語であるというような，どんな語がどの敬語の種類にあたるのかという暗記は行わないこととする。(2)で述べたように，本研究の目的が，文法知識を暗記することではなく，敬語という文法を足掛かりに内容理解を促すということにあるからである。ただし，土屋(1994)の述べるように，どの語が敬語であるか判断しなければ，上記の判別はできないため，どの語がどの敬語の種類にあたるのかは，文法書を用いて調べさせることとする。

②生徒にとって初見の古文教材を用意し敬語の読解を行わせる。(習得した知識の活用)

敬語の性質から，生徒に敬語に着目させ自ら文章を読解させることにより，前後の文脈に目を向けさせ，話の内容や登場人物の人物像を想像させる。そして，そのような思考を働かせることは，受動的に授業を受けるよりも充実した内容理解を生むのではないかと考えた。

３　実践案

実践校では，普通科高校第２学年文系クラスで『枕草子』を用いて授業をすることになったため，本項では，『枕草子』の教材的価値と，それに適した指導事項や育成可能な資質能力を見出していく。それを踏まえた上で，２で明らかとなった敬語の指導法を取り入れた授業実践案を考察していく。

(1)研究対象とする生徒像と科目について

本研究は，今後の古文教育で生かせるものにしたいため，現行の学習指導要領ではなく，新学習指導要領に対応した実践としたい。実践対象の生徒が第２学年であること，普通科の文系クラスであることから，新学習指導要領で新設される「古典探究」での実践がふさわしいと考える。

「古典探究」は，「古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し，自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視して新設した選択科目」である(文部科学省，2018)。「読むこと」に特化した科目であるが，浅田(2018)は，文法や語句を叩き込んで読解や解釈の指導ばかりするのは論外であるとし，「あくまで『古典探究』は，生徒が古典に対しあらゆる角度から前向きに『探究』していくよう導くべき科目なのである」と述べている。

(2)『枕草子』について

本節では，「古典探究」で『枕草子』を取り扱う際，どのような指導事項を設定するべきかを検討するために，『枕草子』の先行研究を見ていく。

まず，取り扱う章段を考察する。本研究は，敬語の指導を中心に行うことから，『枕草子』の中でも，敬語が多用される章段を教材とすることがふさわしい。よって，清少納言とその主人である定子という身分差のある二人の会話場面が多く描かれている日記的章段を取り扱うべきであると考える。

次に，日記的章段の先行研究に当たることで，指導すべき事項を考察していく。日記的章段において，中宮定子は「をかし」や「めでたし」という形容詞を用いて表現されており，清少納言が中宮定子に対して敬意をもって勤めていることがよくわかる内容となっている。では定子の人生は『枕草子』に描かれたように華やかなものであったのだろうか。実際は，定子やその兄弟の人生は輝かしいものではなかった。中宮定子を初めとする，中関白家の栄光と没落は，藤本(2007)が端的にまとめている。

> 定子の兄の伊周を二十一歳の若さで内大臣に任じたのをはじめて，弟の隆家を三位に進め，妹原子を東宮妃に立てるなど，目を見張るような栄華がこの一門を輝かせるかと見えた。ところが長徳元年(九九五)に道隆が病没すると，一門の運命は暗転する。息子を後継にと望んだ道隆の遺志は叶えられず，関白の位は弟の道兼に，続いてその道兼も亡くなると，下の弟である道長の手に掌握されることとなった。さらに翌長徳二年，伊周・隆家兄弟が花山法皇に対する不敬のかどで流罪に処され(長徳の政変と称される)，懐妊中の定子も自ら鋏を取って出家を遂げてしまう。

このような没落の様子は，定子一家の宿敵であった道長の繁栄と共に,教科書教材でもある『大鏡』や『栄花物語』に詳しく描かれている。そのような作品があるのに対し，没落を側で見ていたはずの清少納言は，この事実を『枕草子』に殆ど描かなかった。中関白家の政治的惨敗は誰の目にも明らかな事実であるとした上で，藤本は以下のように述べている。

> この悲運の后が一国の帝王の心を捉えて離さず，その魅力ひとつで道長の絶大な権勢と対峙したことや，彼女の後宮の風流が殿上人を魅了したこともまた事実である。不遇の日々の中で，定子が最期まで雅の気骨を保ち続けたということは，清少納言が記さなかったら歴史の闇の中に葬り去られたことだろう。その見事な生の軌跡こそ,『枕草子』の最も伝えたかったところではないだろうか。

藤本の述べるように，清少納言は敢えて定子の没落を描かず,「をかし」「めでたし」とされる部分だけを書き残したという見解が一般的である。このような『枕草子』に描かれていない中関白家の没落を,『枕草子』から読み取ろうとすることについて，圷(2001)は,

> 日記的章段のよみにおいて，その本文上に描かれている場面から，描かれていない暗部をことさら冷徹な目でよみ取ろうとすることは，『枕草子』の湛えるみずみずしい文学性の感受を妨げる大きな要因になっていると思われる。

と批判している。これに対して板東(2014)は,『枕草子』の本質を理解しその文学性を感受するには,「描かれたもの」と「描かれていないもの」を重ね合わせて読む必要があると述べている。また，森野(1981)は,『わかる古典』の中で,『枕草子』の世界について理解を深めるためには，その時代の人物関係の知識を整備しておくことが不可欠であると述べている。そして，そのような知識を踏まえて読み直すと,「今まで見えなかった局面が顔をのぞかせ,遠く彼方の世界に思われていたのが,にわかに身近に感じられるようになる」と述べている。確かに，圷が述べるように，清少納言が敢えて描かなかったと考えられる定子一家の没落を,『枕草子』の中から読み取ろうとするのは，清少納言の意志に反することかもしれない。しかし，板東や森野が述べるように,『枕草子』に関わる人物関係の知識や背景を踏まえて読むと，一見清少納言の自讃談に見える日記的章段に対する見方が変わり，より内容理解が深まり，作品の面白さを味わうことができるのである。このように，比較読みを通して登場人物や作品への理解を深めることは，国語科で身につけるべき力の育成に有効である。よって『枕草子』は,「古典探究」の指導事項である「作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め,作品の価値について考察すること。」を指導するのにふさわしいと考える。

(3)『栄花物語』について

『栄花物語』は平安時代後期に成立した歴史物語である。(2)でも触れたように，藤原道長の栄華を中心に物語が展開されており，道長の政敵である定子やその兄弟の没落の様子も描かれている。『枕草子』では知り得ない没落が描かれていることから，指導事項の「作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ」ることができる作品であるため,『栄花物語』は補助教材として用いるのに適していると考える。

また,『栄花物語』は，敬語にも特徴がある。天皇や中宮にしか使われないはずの絶対敬語が,道長に対して使われているのである。ここから,道長を天皇と匹敵する存在と見る作者の意図が感じられる。敬語の用いられ方を比較することによって，さらに『枕草子』への解釈を深めることができると考える。

『枕草子』に描かれていない定子一家の事実が描かれていること，敬語の用いられ方に特徴があることから,『栄花物語』は『枕草子』の理解を深めるのに適した補助教材であると言える。

(4)具体的な実践案

・主教材：『枕草子』「中納言参りたまひて」

・補助教材：『栄花物語』

・指導事項：「作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み，その内容の解釈を深め，作品の価値について考察すること。」

・授業の流れ

①「中納言参りたまひて」を用いて，敬語の指導を行うことにより，生徒に，登場人物の人物像や話の内容を捉えさせる。 ②『栄花物語』と『枕草子』の比較により敬語の用いられ方や人物の描き方の違いを捉えさせる。

内容理解を促す敬語の指導をした上で得た人物像と,『栄花物語』等で得た定子一家の人物像の違いから,『枕草子』への解釈を深めることで，生徒のものの見方・考え方を広げる狙いである。補助教材の『栄花物語』は現代語訳付きで用いることとし,その他必要な情報を得るための補助教材は,国語便覧と『超訳百人一首　うた恋い。３』(杉田圭，メディアファクトリー，2012)とした。

・敬語の指導

①「中納言参りたまひて」を３つに分割する
②４人グループになり，それぞれ担当を決める
③担当箇所ごとに集まり，敬語表現を読解する
④もとのグループに戻り，共有する

「中納言参りたまひて」は，中宮定子，中納言隆家，清少納言という身分の異なる３人が登場する章段であり，多くの敬語が用いられている。章段全ての敬語について生徒に取り組ませるのは，生徒の負担が大きいと考えたため，３つに分割することとした。また，グループワークを取り入れることにより，生徒の負担軽減と主体的な学びを促すことを狙った。

グループにわかれた際の生徒の具体的な活動は以下のとおりである。

①敬語に印をつける。
②敬語の種類を文法書で調べる。
③誰から誰への敬意か考える。

③を考えるには，登場人物は誰なのか，身分差がどれほどあるかという情報がなくてはならないため，この学習活動に入る前に，章段の登場人物である清少納言，中宮定子，中納言隆家の身分差について解説を行うこととした。よって生徒は，身分差の情報と，敬語それぞれの特性を知った状態で「中納言参りたまひて」を読解することとなる。

４　実践

(1)教材・対象・時期

教材：『枕草子』「中納言参りたまひて」
対象：山形県内公立高等学校第２学年
　　普通科文系２クラス
時期：平成 30 年 10 月

(2)単元目標

作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ,枕草子への解釈を深めることができる。

(3)単元計画

	主な学習活動	言語活動の工夫
1	『枕草子』の基本情報を知る。 「雪のいと高う降りたるを」の読解を行う。	助動詞「す」「さす」を理解する。 清少納言と中宮定子の人物像を掴む。
2	「中納言参りたまひて」の読解を，敬語表現を中心に行う①	敬語表現から登場人物を推測する。 (グループワーク)
3	「中納言参りたまひて」の読解を，敬語表現を中心に行う②	一斉教授にて，敬語表現の確認と内容の読解を行う。
4	人物系図の解説を行う。 『栄花物語』「伊周・隆家の配流」を読む。	人物系図の解説や『栄花物語』から政治的背景を理解し，描かれ方の違いを捉える。
5	３人の人物像を改めて考える。 清少納言が『枕草子』に込めた思いについて考える。	学習プリントを用いて生徒に自分の考えを記入する。 感想を記入する。

５　生徒の様子と考察

(1)敬語の指導に関するもの

①授業態度から

２時間目，机間巡視によって生徒の様子を確認したところ，大多数の生徒は，敬語の種類までは把握できていたのだが，誰から誰への敬意かを考えるところで行き詰っている様子が見られた。生徒の交流の様子から，３パターンの考え方があることがわかった。

・パターンＡ

「隆家こそ…」という台詞から，中納言隆家自身が自らのことを「隆家」と呼ぶはずがないので，この台詞は中宮定子が言ったものである。よって，中宮定子から中納言隆家への敬意である。

このように考える生徒は，「隆家こそ…」という中納言隆家の一人称を，現代的な感覚で読んでしまっていることがわかる。また，登場人物の中で最上位の中宮定子が敬語を使っていることに疑問を感じていないことから，敬語という文法・表現への理解が不十分であることもうかがえる。

・パターンB

> 「隆家こそ…」という台詞から，中納言隆家自身が自らのことを「隆家」と呼ぶはずがないので，この台詞は中宮定子が言ったものである。しかし，中宮定子は登場人物の中で最も身分が高いため，誰にも敬語を使うはずがない。よって，中宮定子自身への自敬表現である。

中宮定子が敬語を使うはずがないという考え方から，身分差への理解と，敬語への理解はある程度あると思われる。しかし，「隆家」という一人称への違和感を捨てられなかった結果，天皇や中宮が用いる自身への敬意表現である自敬表現であると解釈している。しかし自敬表現は尊敬語でしか用いられず，丁寧語は，話し手から聞き手への敬意表現であるため，自分自身への敬意とはなり得ない。

パターンAとBは誤答であるが，この誤りは，古典の世界や敬語への理解を深めるきっかけとなり得る誤りであると考える。「隆家」が一人称であるということは，古典の世界と現代との感覚の違いの認識につながり，敬語に関する知識不足からくる誤りは，敬語の理解をより深めることにつながる。そしてAもBも，敬語の読解を行う過程で，人物や話の内容に目を向けていることがわかる。

・パターンC

> 文脈的に，中納言隆家が中宮定子へ扇を持ってきた話なので，台詞を話しているのは中納言隆家である。また，「侍り」は丁寧語であるため，話し手から聞き手への敬意である。この場面での聞き手は，扇を受け取る中宮定子なので，話し手中納言隆家から聞き手中宮定子への敬意である。

「隆家」という一人称を誤認せず，文脈と敬語の知識から読解を行っている。生徒への指示は敬語の読解のみだったが，生徒は自然と前後の文脈や話の内容にも着目していることがわかる。

以上 A～C の３つの反応が見られたが，どの反応にも共通しているのは，敬語を手掛かりに，この台詞は誰が話しているのか，どういう話の内容なのか，人物関係はどうなっているのか，というところに着目しているということである。本研究の狙うところは，敬語の正確な理解ではなく，敬語を足掛かりに内容理解の充実を図ることである。このような生徒の反応から，敬語に着目させることは，話者や話の内容を想起させる効果があることがわかる。

②生徒の感想から

以下挙げる生徒の感想は全て原文ままである。

> ・敬語を考える時に現代語訳も何もない状態からだと少し難しかったが，話の流れを想像しながら自分で考えたことで考えがより深まった。
> ・敬語をちゃんと識別すると登場人物の上下関係がわかるので現代語訳が楽だし，ストーリーが見れておもしろいと思う。

①では，机間巡視で見られた生徒の様子から，話の内容を想起しながら読んでいる様子が見られると述べたが，このような生徒の感想からも，敬語の指導は話の内容や人物像を想起させ，内容理解へとつなげる効果があると言える。

> ・今まで枕草子を勉強する際，登場人物それぞれの身分や背景をあまり気にせずに読んでいたため，今回の敬語の学習がとても楽しかった。

この生徒が今まで持っていなかったであろう，登場人物の身分や背景を想像したり，それらを踏まえて読んだりする視点を，敬語の学習を通して得ている様子がわかる。

> ・誰が話しているのかわからない会話文で，定子が話していると思ったら，定子は敬語を使わないから，隆家だ，とか誰から誰への敬語かを色々見分け方があって次読む文章でもいかせそうでした。
> ・枕草子の二つの物語を通して，敬語の見分け方や誰から誰への敬意なのかを考える力を身に付けられたと思います。

敬語を，ただ暗記するだけの文法知識と捉えるのではなく，本文を理解するための手掛かりとし

て捉えていることがわかる感想である。このような感想が出たからと言って，確実に，生徒に敬語を読解する力が身についたとは断言できないが，生徒に，敬語という文法は古文作品を読む上で重要な文法であるということを感じさせることができた実践になったと言えるのではないだろうか。

・グループワークをして一度間違えたほうが頭に入りやすい。
・敬語の用法をグループで分担して考えたとき少人数の活動であったため責任を感じ，徹底して考えることができた。

グループワークが効果的であったことがうかがえる感想である。受動的な授業・文法指導よりも，生徒自身が敬語と向かい合うことによって，より学びが定着するのだと考える。

以上①②から，本実践の敬語指導は，文法指導として独立することなく，生徒に内容理解を促す効果をもたらすことがわかった。

(2)内容理解に関するもの

敬語の指導によって生徒が想起した人物像や話の内容を，本文読解により確認したのが３時間目であり，『枕草子』で掴んだ人物像とは別の角度から定子一家に迫り，より内容理解の充実を図ったのが４時間目の実践である。本節では，主にそういった内容理解に関わる感想を挙げ，授業の目標を達成できたのか，十分な内容理解ができたのかを検討していく。

①プリントの記入から

５時間目には，プリントを用い，中関白家の没落を『枕草子』に描かなかった清少納言の想いについて生徒に考えさせ，自分の言葉で表現させた。以下はその一例である。

・清少納言は自分がずっと仕えてきた中宮定子の最も輝いていた頃の様子を描きたかったから。
・現実や結果がどうであったとしても，定子が風流心があり，遊び心のある人だということを描きたかったから。あえて暗い結末は描かなかったのだと思う。自分がお仕えし，尊敬している定子との明るい日々を描きたかった。

生徒の中には，教科書の一部を引用したような記述が極少数見られたことから，全員の理解度を深めたとは言えない。しかし，大多数の生徒は以上のような記述が見られたことから，本授業において生徒に感じさせたかったこと，考えてほしかったことは達成できたと考える。

②生徒の感想から

・読み込んで内容を理解していく中で，上下関係や人物像がわかっていきおもしろいと思った。
・登場人物の性格などを理解して学習すると，さらにおもしろみが増す。

人物像や人物関係を掴むことで，『枕草子』をおもしろいと感じる生徒がうまれている。人物像を把握する授業は，生徒に対し，古典作品を生きたものとして感じさせられることがわかる。その，人物像を把握する手立ての一つが，今回行った敬語の指導であったため，この感想からも，敬語の指導と内容理解の充実を図ることができたと言える。

・重要古語や助動詞，係助詞などを調べ，現代語訳をしただけの授業より，教科書や資料集以外の教材を用いたり，裏話のようなところまで細かく学習できたので，いつもよりも楽しく学べた感じがしました。

「いつもより楽しく学べた」という言葉から，少なくともこの生徒にとって今回の授業はあまり苦痛なく受けられたことがわかる。内容理解の充実を図ることは，古文嫌いの生徒が多い現状の打開策となることは，先行研究によりあきらかであるが，本実践によって，そのような実践と文法の指導の両立が可能であると言えるのではないだろうか。

６　課題の考察

(1)敬語の指導法について

敬語に着目した指導は一定の成果はあったが，３時間目に生徒の誤りに気づかせた際の教授法を，より工夫することができたのではないかと考える。例えば，なぜ間違いであるのかを考え直す時間や，もう一度敬意の対象について確認する時間を与えるなどの対応を取れば，より生徒の学びを深められたと考える。

(2)知識の教授法について

４時間目は，生徒の活動は人物系図に書き込み

をするにとどまり，授業者からの説明が多い授業となった。生徒の感想の中に否定的な意見はなかったものの，このような知識の習得の場面であっても，生徒が自ら知りたいと感じ，調べられるような手立てがあると，より良い授業になったのではないかと考える。

(3)補助教材『栄花物語』の用い方について

『枕草子』と『栄花物語』には敬語の用いられ方に違いがあり，そこに着目することによって，敬語という文法を通して各作品における人物像の違いに迫るという取り組みを想定したが，本実践では，(2)に挙げたような『栄花物語』の説明や内容理解そのものに多く時間を割いてしまったことから，想定した指導に及ぶことができなかった。『栄花物語』と『枕草子』の敬語の比較を行うことができれば，より充実した内容理解と敬語の指導になったであろうと考えられる。そのためには，授業時数の確保と，(2)に挙げた知識の伝授法等の授業内容の精選が課題として考えられる。

(4)科目設定について

本研究は「古典探究」で実践を行ったが，生徒の授業の発問や生徒の到達度を見ると，「古典の価値を考察する」というところまでは達成できていないように思われ，「言語文化」止まりであるように感じる。「古典探究」が求める学びと発展させるためには，『枕草子』学習後の生徒への発問の工夫や学習活動の設定をする必要があると考える。

(5)検証方法について

今回の敬語の指導法が，内容理解の充実と結びついたのかを検証する方法が適切であったとは言い切れないと考える。現在考えうる改善案としては，２・３時間目に生徒が自力で敬語を考えた際に，どういう話の内容だと想像したのか，どういう人物像を思い描いたのかを，生徒に考えさせ，それをまとめる機会を設けることが挙げられる。それによって，生徒の思考がまとまり，より充実した内容理解へとつなげることができると考える。

引用文献

圷美奈子(2001)「殿などおはしまさでのち」，『枕草子大事典』，勉誠社，pp. 401-405.

板東智子(2014)「国語科教員養成で出会う『枕草子』(2)」，『教育実践総合センター研究紀要』，第 38 巻，山口大学教育学部附属教育実践総合センター，pp. 39-48.

藤本宗利(2007)「解説」，松尾聰・永井和子『日本の古典をよむ⑧枕草子』小学館，pp. 302-311.

川本信幹(1989)「まず助動詞を教える古文入門読解に即した文法指導の工夫」，大平浩哉，『高等学校国語科　新しい授業の工夫 20 選〈第２集〉古文・漢文編』，大修館書店，pp. 94-99.

久保田淳(2006)『ことば，ことば，ことば』，翰林書房.

前田富祺(1998)「今なぜ古典文法か」，『国文学　解釈と教材の研究』，第 43 巻，第 11 号，學燈社，pp. 6-12.

文部科学省(2018)『高等学校学習指導要領解説国語編』，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf(最終閲覧日 2019 年１月 29 日)

森野宗明(1976)「古典の敬語に強くなる法」，『国文学　解釈と教材の研究』，第 26 巻，第 2 号臨時号，學燈社，pp. 168-188.

森野宗明(1981)『わかる古典』，三省堂.

仲尾光康(2014)「『文法偏重の古典』から『興味・関心を高める古典』の授業へ」，『日本語学，第 33 巻，第 13 号，明治書院，pp. 44-52.

仲村計美(1989)「古典入門期の敬語法の指導」，大平浩哉，『高等学校国語科　新しい授業の工夫 20 選〈第２集〉古文・漢文編』，大修館書店，pp. 84-88.

田中牧郎(2018)「言葉に関する指導事項について」，『日本語学』，第 37 巻，第 12 号，pp. 80-91.

富井(2004)『富井の古文読解をはじめからていねいに』，東進ブックス.

土屋博映(1994)「古典の敬語をどう教えるか」，『国文學解釈と教材の研究』，學燈社，pp. 122-126.

山内益次郎(1975)「清少納言と定子」，『枕草子講座Ⅰ　清少納言とその文学』，有精堂，pp. 94-103.

Educational Method of Classics to Comprehension of Grammar's Professor and Content : Focusing on Expressions of Honorifics and Using Makuranososhi

Ayaka MATSUMOTO